学苑　第七七九号　五二～六八　（二〇〇五・九）

島崎藤村をめぐる人々

――人見東明・中村星湖・田中宇一郎――

佐々木　満子

（一）はじめに

島崎藤村（明治五・三・二五―昭和一八・八・二二　1872～1943）は昭和女子大学（以下本学と記す）がまだ日本女子高等学院と称した頃（大正九年～昭和二十一年）、本学を二度訪れている。最初は大正十四年、学生に「イブセンの『人形の家』を読みて」[注1]と題して講演をし、二度目は昭和九年、中等学校教員のために開催した明治文学講習会の茶話会に主賓として招かれた。本学の創立者人見圓吉（東明）や、当時本学の教授だった中村星湖との縁によって実現したのであろう。また本学の図書館には、藤村の大作『夜明け前』の校正刷の一部が秘蔵されているが、昭和四十一年三月に東明が田中宇一郎からこれを寄贈された経緯は後述する宇一郎と人見圓吉の間に交わされた書簡によって明らかである。本稿ではここにあげた三人と藤村との関係を述べながら、これらに就いて紹介したい。先ず最年長者の人見東明から始める。

（二）人見東明

若い頃は詩人として活躍した人見圓吉（明治一六・一・一六―昭和四九・二・四　1883－1974）は、はじめ東村と号したがやがて東明に改めた。藤村と同音であったからという。藤村への遠慮からであろう。しかし、後年、岩野泡鳴に音が似る結果になったとも述懐していた。後に紹介する田中宇一郎に宛てた書簡によると、東明が初めて藤村の話を聞いたのは、九段中坂下のユニヴァサリスト教会、即ち東京ユニヴァサリスト中央教会であった。この教会の牧師赤司繁太郎は、自ら校長を兼任した教会付属の成美高等英語女学校で、明治四十年五月中旬から、始業前の一時間を利用して閨秀文学会という文学の講座を開き、島崎藤村、馬場孤蝶、戸川秋骨、平田禿木、上田敏、与謝野夫妻等を講師に招いた。また教会堂をさまざまな講演会や講習会のために開放、ここで四十年一月から四月まで、上田敏の主宰する芸苑社の講演会が開かれた。藤村は二月九日、「種を播く人」と題して講演している。東明が聞いたのは多分この講演であろう。

赤司はまた自宅に置いた世光社から、月刊紙「ユニヴァサリスト」を発

行した他、四十一年十月には雑誌「新天地」を創刊した。これに先立って同年七月三日発行の同紙に、赤司繁太郎、木下尚江、人見東明の連名で「新天地発刊の辞」を掲載、翌八月三日の同紙には、この雑誌の発刊に就いてアンケートの返信を載せた。夏目漱石、森林太郎、新渡戸稲造、坪内逍遥、島村抱月ら二十九名の賛同者の中に藤村の名も見える。

「新天地」の発刊は、世光社の「思潮界勃興の気運に応じて我が宗教、文芸及び社会の刷新を図り、以て近代人文の発達向上に資せん事」（「世光社々則附社友募集」ユニヴァサリスト　明41・9・3）[注2]という目的達成のために計画された。「毎号菊版百五拾頁にして全体の誌面を四分して、その二を宗教欄及び社会欄とし他を文芸欄に宛て、残る一を社友の作物を以て飾る」（同前）方針であった。主筆赤司は宗教問題、木下が社会問題、東明は文芸と編集を担当した。二号以降の編輯兼発行人は人見圓吉になっている。「新天地」はしかし、資金が続かず、四号で廃刊した。

終刊号となった二巻一号（明42・1・1）は口絵に「イブセンの肖像と筆跡」を掲げ、「論叢」欄を「イブセン研究」の特集としてジュリアス・オルゾン、島崎藤村、柳田国男、戸川秋骨、TY生、梅沢和軒、岩野泡鳴、馬場孤蝶、エドマンド・ゴッスの文を掲載した。藤村は「イブセンの足跡」と題して、イブセンは「煩悶を放擲せず、無思想な生活にも隠れず」「晩年に到るまで人生の研究者」としてその態度を続け得た。彼は「暗い雪の中に足跡を印して深く々々辿つて行つた『ボルクマン』のやうだ。」彼は「自分等には大きな建築物のやうな気がする。幾つも広い部屋を通り越して、もうこうで尽きたかと思ふと、また戸がある。戸を開けると、また部屋がある。三階、四階がある。（中略）高い塔もある。」と評している。

同じ号の「本欄」中、東明は「静夜漫録」と題して岩野泡鳴や福田夕咲の詩をはじめ、内田魯庵、徳冨蘆花、水野葉舟の作品の感想を述べた。藤村の『春』に関しては、戸川秋骨の「背景が出ていない」、「当時の時代を描かなければ其時代の青年を描く事が出来ぬ訳だ。」（「春」国民新聞　明41・12・8）という批評を紹介し、作中人物の描写について、「主態と容態の情調の融溶に脉搏の通徹した者があつて好い」と述べる。また、前年の秋、東明が北村透谷の未亡人に会った際『春』に対する感想をたずねた折の発言を、「私共が知つてゐる事実、知つてゐる人物、何れもよく写されてはゐますが、あれではお気の毒だと思ふやうな個所もありました。」と記し、モデル問題は、芸術的倫理的二様の解釈がなりたつが、二つの領分を区分して考えるべきだと述べている。小説『春』はこの前年、「東京朝日新聞」（明41・4・7～8・19）に連載され、同年十月、単行本（緑蔭叢書第二編）として出版された。先に藤村の「並木」（文芸倶楽部　明40・6）が出てからモデル問題が論ぜられ、『春』についても同様であった。

東明は明治四十二年秋読売新聞社に入社し、文芸部五面を担当。一年後には相馬由也にかわって所属面の主任になるが、大正三年十二月頃退社した。藤村は早くから読売にも執筆、同紙には藤村の消息や作品の紹介、批評などがしばしば載った。東明の在職中には藤村の小説「家」（明43・1・1～5・4）が連載され、大正三年九月二十八日には徳田秋声と上司小剣に宛てた藤村の「戒厳令下の巴里より」が、そして十一月二日にも上記二名に宛てた私信「リモオジュにて」が掲載されている。

東明は明治四十四年二月と、六月から九月までHTMまたは青鳥のペンネームを用いてその月の雑誌について、また七月と八月には「文芸週間彙報」を載せた。それらの中で藤村の作品にも言及したが、「六月の雑誌」では「文章世界」に載った「母」について、

藤村氏の「母」は生みの母を知らなかつた森夫と云ふ青年が、自分の家の下婢であつた女が死に望んで、始めてその女が生みの母であることを知る迄の其の女に対する森夫の心持と、其の女が秘密を包んで実子に対する女の心持が、匂ひの高い空気で包まれてゐる。斯う云ふ事は得てあり勝な事であるが其の心持の推移が極めてなだらかに書かれてあるので、僕の如き心持のみを味はふとする者には面白いものであつた。

（読売新聞　明44・6・8　『人見東明全集』第五巻による）

と批評している。

東明は大正五年四月、東京女子商業学校の窮状を知り、無給講師になって以来女子教育に関心をもった。七年四月から東京府北豊島郡高田村若葉十八番地の自宅で文化懇談会を開き、翌八年四月、これを日本婦人協会と改め、毎月一回講演会と研究会を開催する。そして大正九年九月十日には、小石川幼稚園を借用して日本女子高等学院を設立した。本学の前身である。

詩人としては『夜の舞踏』（明44・6　扶桑社）、『恋ごころ』（大3・12　金風社）、『愛のゆくへ』（大10・11　尚文堂）を出版。十一年十二月から十二年二月にかけて編者として『近代名詩選』三編を近代名著文庫刊行会から出版した。この詩選集は一冊にまとめて最終刊と同時に南天堂から出版された。藤村の詩はその第一巻の巻頭に「おえふ」「狐のわざ」「春やいづこに」「おくめ」「傘のうち」「小諸なる古城のほとり」「椰子の実」の七篇を収録。作者に就いて、

島崎藤村氏、名は春樹、明治五年二月［筆者注　旧暦］生、明治学院出身、早くより雑誌「文学界」に詩作を発表し、清新にして洗練、巧緻を極めたるその作風は、混沌たりし当時の詩壇に光明を投げたるが如くその風を慕ふ者が多かつた。その詩作は全部「藤村詩集」中にあり。後小説の創作に移り、又フランスに遊ぶ。ひたすら芸術に身をさささげて他念なし。その作風嘆称に値ひす。

と記している。

しかし東明は関東大震災以後、交蘭社から出版された『散文・詩集　噫東京』（大12・11）に一篇の散文と三篇の詩を載せた後は三十年余り詩筆を絶った。「生きた人の頭の中に、生きた言葉をもつて信ずるところの真、善、美を描いて行こう」（「昭和女子大学三十年史」学苑　昭25・10）の決意を実践するためであった。

先に筆者は藤村の二度の本学訪問に触れたが、ここで藤村の講演に就いて述べることにする。

本学の図書館に大正十四年九月一日に発行された「女性文化新秋号」という二十四ページの小冊子がある。発行所は当時の日本女子高等学院の所在地東中野一五九五の女性文化学会。論文、詩、短歌、紀行、合評などを載せ、会員制であるが、執筆者は本学の教員や卒業生並びに在学生が大部分を占めている。その中に島崎藤村の「イブセンの『人形の家』を読みて（承前）」があり、「編輯余録」に「島崎先生の『イブセンの人形の家を読みて』も愈々本号で完結しました。」とある。残念ながら本学にあるのはこの一冊のみでこの講演は前半が欠けている。しかし幸いにも藤村は大正十二年六月十六日、松本女子師範学校の講堂で同じ題で一時間半ばかり講

演をしており、それが翌十三年七月の「彰風会報」に掲載された。『藤村全集』第九巻（昭42・7　筑摩書房）に収録されたこの「『人形の家』を読みて」の後半と「女性文化」のそれとを読み比べると殆ど同じである。従って同誌の「学院消息」欄に、

既報の如く、女子高等学院学友会主催の夏の自由講座は七月十一日から五日間同学院内で開催されました。校内及び校外から各一名宛の講師が最も有益な講話をなさいまして、深い知識と強い感激を与へられました。

とある校外からの講師とは藤村のことで、講演の前半は同年八月発行の同誌に掲載されたと推測される。次に欠けた部分を『藤村全集』で補いながら講演の大要を述べる。

藤村はまず、ヨーロッパ、アメリカ、並びにアジア各国で婦人が目覚めて来たことは、近代の著しい事実であるとする。イプセンは婦人を覚醒させた一人であった。イプセンは彼の寓居を求めて旅から旅への孤独な半生を送ったが、そうした孤独の中でこそ世の中の真相を見抜くことが出来、眠っていた婦人の窓を叩いて一つの鏡を置いて行った。その鏡の中に映っている婦人がノラであるという。そしてその鏡の中に映っている他の人々、すなわちヘルメル、ノラ、リンデ夫人、クログスタット［筆者注　クロクスタ］の人物像を劇の筋書きを追いながら第二幕まで紹介し、イプセンの生きた時代はノルウェーでも今日のように複雑な思想が入り乱れていたが、イプセンは「社会組織の根底を『性』にありと見た人」で、そこがイプセンの他の思想家や写実家と異なった点であると述べている。

次いで第三幕におけるノラの目覚め—妻であり母でありながら父からも夫からも人形扱いにされ、人形のように可愛がられていた自分を省み、まず自らを教育して人間として生きようと決意して家を出て行くまでを詳細に語る。そして次の言葉で講演を終わっている。

ノラと申せば、所謂新しい女の代表的な型のやうに今日考へられて居ります。けれども実際イブセンの描いたノラは決して浮いた調子の婦人ではないのです。そこには真にへり下った女らしい心持も読まれます。しかも毅然とした精神が眼ざめた女の前途を貫き照して居ます。

私共がこれを読んだ時には、そこにいろ〳〵なものを見つける思ひをします。新しい道徳の芽、婦人の性の認識、子供の世紀にまで繋がって行って居る人と人との関係、それらの宿題の横たはってゐるのを見ます。これ等の宿題は皆さんや私達の眼の前にあるといふばかりでなく、尚これから来るべき時代にまで残されて行くべきでありませう。(注)3

イプセンの『人形の家』は一八七九年（明治十二年）に出版された。藤村は松本女子師範学校の講演の中で、スウェーデンのある夫人がお茶の会の招待状に、「イブセンが最近に出した作のことに就いては御遠慮下さるやうにと書いた」（『藤村全集』九巻　昭42・7）という話を紹介している。

『人形の家』は日本では高安月郊がはじめて翻訳し、『社会の敵』と共に『イブセン作社会劇』として明治三十四年十月、東京専門学校出版部から出版した。イプセンはこの頃から次第に読まれるようになり、三十五年四月の丸善の「学燈」は、イプセンの略年譜を掲載、五月号には、ブランデスの*Ibsen and Bjornson*、エーゲルの『イブセン評伝』、ウィリアム・アーチャー訳*Prose Dramas*の到着を報じている。藤村は小諸から田山花

袋に宛てた明治三十五年十一月九日付の手紙の中で東京に出た折丸善で三部を買ったともいい、「イブセンにつきては十分に研究致度存居候」（『藤村全集』十七巻　昭43・11）と書いており、蔵書の中には、Scott Publishing Co. 出版の *Henrik Ibsen's Prose Dramas* edited by William Archer をはじめ、イプセンの作品や研究書など計六種がみられる。（『藤村全集』別巻　昭46・5参照）また『春を待ちつゝ』（大14・3　アルス）には「四つの問題」（東京朝日新聞　大14・1・22～24・27）と題して、ブランデスのイブセン論にふれ、宗教、時代、階級、性の問題を考え、「昨日の旧い問題が今日の新しい問題であること」を思い、「新たな感激を覚え」たと述べている。（『藤村全集』九巻　昭42・7による）『人形の家』は明治四十三年一月に島村抱月がウィリアム・アーチャーの英訳から重訳し、「脚本人形の家」として「早稲田文学」に掲載、翌四十四年九月には牛込余丁町の坪内逍遥邸内の私演場で、抱月訳「人形の家」が上演され、松井須磨子がノラを演じている。

この作品については婦人解放の書として歓迎する者と、結婚生活を破壊するものとして非難する者とがあった。例えば先にあげた「新天地」二巻一号の「イブセン研究」を見ても、執筆者九名中、七名がこの作品に言及し、うち三名が後者の立場であった。先にあげた東明宅における文化懇談会や日本婦人協会においても、婦人解放論を唱えたエレン・ケイのことや、この『人形の家』の夫ヘルマーと妻ノラのことなどがしばしば論じられたという。

やがて東明は大正九年九月十日、次の言葉をもって日本女子高等学院の開講を宣言した。

夜が明けようとしてゐる。

われ等の友よ。その愛らしき眼をとじたまま、逸楽の夢をむさぼる時はもう既に去つた。われ等は、まさに来る文化の朝を迎へるために、身支度をとり急がねばならぬ。正しき道に歩み出すために、糧を十分にとらねばならぬ。そして、目ざめたる婦人として、正しき婦人として、思慮ある力強き婦人として、文化の道を歩み出すべく、互ひに研き合はなければならない時が来たのである。　（開講の詞　第三節）

この一年半後、藤村は十一年四月、麻布区飯倉片町三十三の自宅に設けた処女地社で、折から刊行中の『藤村全集』全十二巻（藤村全集刊行会　大11・1～12）の印税を投じて、「婦人雑誌処女地」を創刊した。その第一号に、

来るべき時代の婦人のためにと思ふものが集まりまして、未熟ながらその支度を始めました。『処女地』に集まるものは、文芸に向はうとするものもあり、哲学や宗教に行かうとするものもあり、教育に従事するものもありまして、志すところは必ずしも一様ではありません。しかし、互に取る道こそ異なれ、同じ婦人の眼ざめを期待します。『処女地』は同人と寄稿家との区別を強ひて立てようともしません。この雑誌に筆執るものはすべて『処女地』の姉妹と考へ、互に手を引き合つて若い時代に趨きたい考へです。

とある。学校の創立と雑誌の創刊と、方法こそ異なれ、東明も藤村も、同じく婦人の眼ざめを念願していたのである。この雑誌は惜しいことに、翌十二年一月発行の十号をもって廃刊した。

藤村が逝去した昭和十八年、本学の機関誌「学苑」は十月号の「学芸余録」欄に、

島崎藤村（本名春樹）氏は八月二十二日午前零時三十五分神奈川県大磯町東小磯の別邸で東方の門［筆者注「中央公論」］十月号の原稿を執筆中脳溢血のため急逝した、享年七十二。

の書き出しでその略歴と業績を紹介。同じ欄に「大東亜文学者大会」の見出しで同年八月二十五日、午前九時から丸之内帝国劇場で行われた第二回大会の模様を報じた文中に、

劈頭久保田万太郎氏より故島崎藤村氏に対し大会より弔詞を呈すべき旨の緊急提案あり、佐藤春夫、久保田万太郎、古丁（満）張我軍（華）の四氏が大会を代表して同日青山斎場で行はれた藤村氏の告別式に参列した。

と記した。

そしてこの号に人見圓吉は「島崎藤村と島村抱月」と題して、次のように故人を偲んでいる。

文学報国会開会式の当日（昨秋十一月三日）帝国劇場舞台上で細々とした双手を挙げ乍ら聖寿万歳を奉唱する島崎藤村は形容枯槁として丘の夕風にそよぐ枯尾花のやうであつた。と同時に、三十数年前九段中坂下のユニバーサリスト教会の壇上に於ける雪を欺くやうな、白哲、漆黒の髪、紅のやうな唇、鈴を張つた黒目勝ちの瞳、眉目秀麗と云ふ言葉を具像化したやうな瑞々とした氏の姿を想ひ出した。その間に三十数年の歳月が流れてゐるとは云へあまりにも痛々しい衰退であつた。あの体力で、果して心に描く大作を完成し得られるであらうか、と藤村の健康を案じたことを思い出し、訃報に接した折、

ぢいつと両の眼を閉ぢて若々しい氏と、老い衰へた氏の二つの姿を描いてしばらくは息気を殺した。悲しいのでも、淋びしいのでも、驚いたのでもない。たゞ「死」と云ふ極めて厳粛な事実に当面して「私」と云ふ者の活動が一時休止したのであつた。

と感慨に耽る。次いで、藤村と抱月が、体軀、性格、理解力、気品の点で似通ったところがあったばかりでなく、窮乏の中で愛嬢三人を失った藤村と、妻子と別れ、茨の道に踏み入って早世した抱月が「芸に執し道に徹する事両者又機を一にした。」といい、

今もペンを措かうとすると大隈侯爵邸にお招きした時、書院南側の縁に静子夫人と共に腰を下ろして、青芝にかげり行く木陰を見つめてゐられたもの静かな氏の姿を想ひ出す。もう八九年も前の事であつた。軽い脳溢血をされたので永い間外出を謹んでゐられてから始めての外出で、あたりの風物が珍しくて泌々としてゐられた。

と往事を偲んでいる。

（三）中村星湖

東明より一つ歳下（明治一七・二・一一―昭和四九・四・一三　1884－1974）

（注4）

の中村星湖（本名将為（まさため）・別号銀漢子）は、東明と同じく明治三十六年早稲田大学高等予科に入学、翌年早稲田大学英文科に進んだ。藤村、泣菫、有明らの詩を愛読し、はじめは詩を作って「文庫」や「新小説」などに投稿していたが、やがて小説や評論を書くようになった。三十九年の夏休み、先輩片上伸に激励されて「早稲田文学」の長篇小説募集に応募するため「少年行」を執筆。一等に当選して四十年五月発行の同誌に掲載され、佐野天声の「意志」と合本で金尾文淵堂から刊行された。同年七月早稲田大学を卒業。島村抱月の世話で「早稲田文学」の記者になった。藤村については四十一年十一月十五日の「読売新聞」に「『春』を読む」を、次いで「五作家の近業―新年諸雑誌に公にされたる藤村、風葉、花袋、白鳥、秋声諸氏の作」（新潮　明42・2）では藤村の「一夜」に就いて、「短篇の小説として、人間、並びに人情と云ふやうなものを、シンプクフハイ（ママ）（注5）して、すぐれた作と思はれたのは、先づ此の一夜である。」と述べた。

四十五年三月の「早稲田文学」には相馬御風、星湖、田中生の三人で「藤村氏の『家』と秋声氏の『黴』」を合評。同年七月「文章世界」に相馬御風、安倍能成、星湖、中原司馬雄の四人で「新著四種」を批評した際には藤村の短篇集『食後』について全作品十八篇をあげて短評した。この頃星湖自身は早稲田文学社から自費出版した『半生』（明41・12）をはじめ『星湖集』（明43・4　東雲堂）、『漂泊』（大2・8　春陽堂）、『女のなか』（大3・10　早稲田文学社）の四冊の短篇集と、長篇『影』（明43・10　金古堂）を上梓している。また四十一年頃暁星中学夜間部で、フランス語、フランス文学を学び、モーパッサンやフロベールについて理解を深め、以後その作品を翻訳した。

大正二年四月、藤村は神戸からフランスへ旅立ち、五年七月に帰国した。この三年間の遊学は藤村の並々ならぬ苦悩の末の決断であった。先に藤村は明治三十八年四月、六年間勤めた小諸義塾の教師を辞して上京後、三人の女児を相次いで失い、四十三年八月六日には四女柳子が生まれたが、同日妻冬を亡くした。遺された四人の幼児（楠雄・鶏二・蓊助・柳子）を育てるという実生活の上でも、また作家としての活動の上でも、苦悩と停滞の時期に差しかかっていた藤村は、年下の二人を知人に託し、二児を手許におくことで生活の平衡を保とうとした。しかし雇いの婆やだけでは間に合わず、次兄広助の長女ひさ、次いでその妹こま子も同居して叔父の生活を助けていた。ひさが結婚した後、叔父と姪とは近親間にあるまじき過ちを冒した。こま子から子供を宿したと告げられ、一時は自殺すら考えたが、たまたま友人から洋行を勧められフランス行きを決意、四月十三日神戸を出発しパリに赴いた。しかし異国での生活に漸く慣れた頃、第一次世界大戦が勃発、一時は戦禍をフランス中西部のリモージュ市に避けねばならず、大正五年四月の末、「自分で自分の手錠を解き腰縄を解く思ひ」（『新生』二巻）で戦時下のパリを去り、七月初め、三年ぶりで故国の土を踏んだ。

七月十日、星湖は芝日本榎西町の藤村宅を訪れたが留守のため翌日再度訪問、「早稲田文学」八月号に、「島崎藤村氏を訪ふ」を掲載した。訪問途上、フランスへ出発する前に蒲原有明、前田晁、平田禿木ら数名と共に旅館信濃屋に招かれた時、藤村がむこうの土へ卸してきたいと菜種や椿の実を見せたこと、溯って学生だった頃新片町の住居をしばしば訪れたことまで回想、この日久しぶりに会った藤村は随分年取ったように思えたといい、日本著作家協会やフランスのアカデミーとゴンクールアカデミー、星湖が唱え出したとされる「問題文芸」や、フランス文壇の現況などが話題になったと記している。

翌六年五月、「中央公論」の四月号に掲載された藤村の「海へ」について秋田雨雀、前田晁、星湖の三人の合評が「早稲田文学」に載った。星湖は「芸術家の生活」と題して藤村が「海へと志したその心持」を「ほんとに死に赴くやうな淋しさと苦しさ」といい、

すぐれた芸術家の心は、普通人の心より強く苦痛を苦しみ、深く歓楽を味ひ、広く一切を見渡すには相違ないが、それだからと言つて『真心』を欠いてゐようとは思はれない、すくなくとも島崎には『真心』があつたればこそ、あのやうな苦痛にも堪へたのである、このやうな『海へ』も書けたのである。

と評している。

藤村の長篇小説『新生』の第一巻は、「東京朝日新聞」（大7・5・1～10・5）に連載され、翌八年一月春陽堂から出版された。第二巻は同年四月二十七日から十月二十三日まで連載し、十二月、春陽堂から発行された。『新生』に関しては、『藤村全集別巻』（昭46・5）に「同時代批評」として中村星湖の「島崎氏の『新生』」（読売新聞　大8・2・2）を始め、「婦人公論」（大9・1）の「島崎藤村氏の懺悔として観た『新生』合評」（正宗白鳥他二十七名）、江間道助の「島崎藤村氏の『新生』」（文章世界　大9・3）、高橋泰の「島崎藤村氏の小説『新生』を読む」（読売新聞　大9・10・3）が収録されている。この中の「婦人公論」の「合評」を見ると、この作品を高く評価しているものがある一方、新聞連載で単行本になってからまだ日が浅かった為か、「前篇のみ読んだ」とか「飛び飛びに読んだ」というものもあり、作品の倫理性や芸術性、登場人物の心理描写についての評価はさまざまである。

このうち、星湖の「島崎氏の『新生』」は、まず新聞では飛び〳〵に読んだので、単行本の刊行を待ち兼ねて春陽堂を訪れたところ、前日、藤村も来て、入荷したばかりの書物の地方発送の荷造りを手伝い、店員たちに天どんを振舞ったという店主の話を紹介。そして真の倫理的批評や芸術的鑑賞は第二巻の出現を待つべきであるが、第一巻のみで模索すると、愛国運動に参加した父やその他の故人を思い、幼い心に立ち戻らねばと思う一方、姪が里子に出した子供に対する愛と残して来た三人の子供の事が脳裡をはなれず、異国に骨を埋める覚悟さえした主人公岸本が祖国へ帰る決心をするのが「『新生』の『新生』たる眼目」と思われる、という。そして、

後に来る者等を思ふ時、（中略）かれの神秘蠱惑を背景としてこれの現実厳粛をいかに処分すべきかゞ作中人物の岸本氏、作者島崎氏と同時に読者であるわたし達の問題となつて来る。そこにわたし達の道徳が起こる。本当の道徳が、本当の批判が。そして盲目的ではない人生が始まる。（一月二十九日）

（『藤村全集　別巻』昭46・5による）

と評している。

同年十二月、「新潮」に連載中の「人の印象」（三十五）に中村星湖が取り上げられ、藤村、前田晁、岡本かの子、岡田三郎、秋田雨雀、田山花袋が星湖の印象を記した。藤村は「十分支度の出来た人」と題して、

中村君は長いこと準備の時代を通つて来た人のやうな気がする。（中略）今は実力のあるものが認められる時代だ。かういふ時に中村君ぐらゐ経歴もあり実力もある人は、もつと認められ、もつと輝いてもいゝ筈だと思ふ。（中略）どうやら中村君の長い準備から撥ね起きる

時が来たやうな気もする。

と期待している。次いで、「私は中村君の折に触れて書いたものを読んで見て、こんなに自分のことなぞを考へて居て呉れるのかと思ひあたることがある。」と、先にあげた読売紙上における『新生』第一巻の批評を取上げ、「中村君は人の気のつかないことにまで気のつくやうな好い眼を持つて居る。（中略）あの中に私が第二巻で書かうと思つて居ることを見抜かれてしまつたところがある。あれから私は一層深く中村君の眼の畏るべきことを知つた。」という。そして「中村君の『かくれ沼』が東京朝日紙上に出はじめた。私は田山君の『新しい芽』と共に毎朝あの作を読むのを楽しみにして居る。」と述べている。

十三年十一月、星湖が編集した『藤村随筆集』が人文会から出版された。随想、評論、紀行集から採録し、藤村と種々相談の上採録したものである。

大正十五年四月、星湖は日本女子高等学院の教授になった。

昭和八年から本学では毎夏全国の中等学校教員に呼びかけて公開講座を開催。戦時中は中止したが、昭和二十一年に復活し四十四年まで継続した。その第一回は「明治文学講習会」と題して昭和八年七月二十七日から八月二日まで、小石川原町の酒井伯爵邸内の金鶏会館で行われた。講師十一名、受講者約百五十名。最終日の午後は星湖が案内して雑司ヶ谷の墓地に眠る夏目漱石、小泉八雲、綱島梁川、島村抱月等明治の文豪の墓に詣でた。そして四時から旧大隈侯爵邸に於いて島崎藤村夫妻を主賓、北原白秋を陪賓に招いて茶話会を催した。星湖はこの折司会をつとめた。

藤村は黒い明石縮の着物に黒絽の羽織袴姿で出席、聴衆の質問などに答えた後、原稿用紙についておおよそ次のような話をした。

「女学雑誌」や「文学界」時代は唐紙に線を引き筆を用いた。『若菜集』はこうして出来た。『夏草』時代には甥に器用なのが居て桜の木で版木を作り、紫のインクで見事な原稿用紙を手作りにしてくれたので以後大いに助かった。『破戒』は添削の都合上鉛筆で書いて出版に際し筆で書き直して非常に面倒をした。その後洋紙にペンで書く事を教わり、万年筆で書く様になったのは随分後の事であった。これを作品に当てはめて見ると『春』はペン、『家』は万年筆で洋罫紙に書いた。フランスでは「フランス便り」を「朝日新聞」に書き送ったが当時は戦争の為種々不便な思いをした。帰国後は甥の作ってくれた版木ももう役に立たなくなって、印刷させた。

（『明治文学講習会の記』昭8・9による）

時代の推移、変遷を思わせる味わい深い話である。

昭和十八年八月、藤村が亡くなった時、星湖は折柄、戦死した二男の遺骨下げ渡し、ならびに横須賀海軍鎮守府における戦歿者合同葬などのため、お通夜にもお葬式にも出席出来なかった。九月六日、麹町六番町の島崎家に長男楠雄、二男鶏二を弔問、長男は臨終に間に合わなかったが弟から聞いた話を次のように語った。

「何でも、九時過ぎに、もう朝飯は済まして、机に向つて『東方の門』の原稿を見直してゐたさうです、すると急に脳溢血が起つて、十五分ばかり意識ははつきりしてゐたさうですが、その後はすつかり昏睡状態に入つて、二十二日午前零時三十五分に呼吸を引き取つたと言つても、それまでたゞ呼吸があつたゞけ……」

「ぢやあ、臨終のお苦しみといふやうなものはなく、全くの大往生を遂げられたのですね、それに机に向つたまゝ御発病、そしてそれが御

最期だったと言へば、軍人が戦場で斃れたのと同じわけですね。」

「さうです、字義通り、書きながら死んだのです。」（九月十七日稿）

（「島崎藤村の死」学苑　昭18・10・1）

そして星湖は、「学苑」と同じ日に発行された「新潮」の「島崎藤村のこと」でこう記している。

私が島崎氏から受取った最後の手紙は、シャルル・ペギイの詩集に関する私からの問合せへの返事で、日付は八月六日、大磯からだった。七十二歳の老翁とは思へず、また二週間後には死ぬ人とは感じられない、実にしっかりした、はっきりしたものだった。これが島崎氏から私への訣別の辞となった。

（九月五日稿）

星湖は昭和二十年五月、郷里山梨県の河口村に疎開、その後は晴耕雨読の生活に入った。二十六年、山梨学院短期大学教授となり、翌二十七年には村の教育委員長となった。三十一年十一月には山梨県文化功労者として表彰された。三十二年、河口湖畔に碑が建ったのを記念して定本『少年行』を刊行。これは同年七月発行の筑摩書房版『現代日本文学全集』84「明治小説集」に収められた。

人見東明は昭和四十九年二月四日、九十一歳で逝去したが、星湖はそれから二ヵ月後の四月十三日、心筋梗塞のため杉並区西荻の長男法政大学教授顕一氏宅で亡くなった。享年九十歳であった。

（四）田中宇一郎

山形県鶴岡市に生まれた田中宇一郎（本名卯一郎　明治二四・一二・一〇―昭和四九・四・九　1891～1974）は東京高等師範学校（現筑波大学）を卒業後、行商、会社員、教員、新聞記者などさまざまな職業に就いたが、やがて文学に親しみ、小説、随筆、童話、評論などを執筆した。

宇一郎が初めて藤村の住まいを訪れたのは大正五年、藤村がフランスから帰国した年の秋頃であった。丁重に迎えて書斎に通され、送っておいた原稿について温かい批評を受けた。以来藤村に師事し、亡くなるまでしばしば訪問した。十三回忌を迎えた昭和三十年九月に四季社から出版した『回想の島崎藤村』は、最初に訪ねた芝二本榎西町から終焉の地となった大磯町東小磯八八の町家園(注6)にある別邸までの住居をはじめ、書斎や庭、子供の教育から藤村の衣服や言行などの日常生活を詳細かつ生々と記している。以下、同書を軸として宇一郎と藤村のかかわりを辿りたい。

大正九年九月二十五日から十年一月十二日まで「エトランゼエ」として「朝日新聞」に連載。同年四月一日から十一年八月一日まで「仏蘭西紀行」として「新小説」に断続連載。同年九月『エトランゼエ』として、十三年十月『仏蘭西紀行』としていずれも春陽堂から出版した藤村の感想紀行文の校正は宇一郎が手伝った。その際出版社から著者に依頼した広告文を宇一郎が書くことになったが、「文豪」と入れたのを藤村はどうしても聞き入れず、削らせたという。

大正十年九月頃、新潮社、国民図書株式会社、春陽堂共同の藤村全集刊行会が結成された折には、有島生馬、吉江喬松、生方敏郎に、若手では木

村恒、原田謙次と宇一郎が編集同人となった。十二巻から成るこの全集は翌十一年一月から十二月にかけて出版された。同じく十一年三月『改編透谷全集』が春陽堂から出版されたが、これは藤村が大正十年の春北村透谷の未亡人から、透谷逝いて二十七年に当たるという手紙を受け取ったのを機に、従来の星野天知編の全集（明35・10　文武堂）とは異なった方針で編集、校正は宇一郎が託された。この頃宇一郎は勤めの他に新聞、雑誌にも創作、随筆、評論、童話などを書き続けていた。

それら短篇七篇を纏めて『悩める人々』（大10・2　聚英閣）を出版。藤村は次のような序文を寄せている。この本は未見であるが「飯倉だより」（アルス　大11・9）に収められた序文を引用する。

処女作とは、言葉そのものの持つ感情からして何となく私達に爽かな心を起させる。文学者の生涯に処女作を出す時ほど美しく、楽しく又心配なものはない。この書が私に取つてなつかしみの深いのは、一つはこの書が私の年若な友達によつて書かれたからであり、今一つはこの書がその人の処女作であるからである。作家としての羞恥と謙遜と熱意とがいぢらしいほどこの書に籠つて居る。この書に対して、私は思はず自分の処女作を出した当時のことを想起した。ほんとに文学者としての私達が処女作を出した当時の心持をいつまでも持ち続けることが出来たならば—長い年月の間に知らず識らず濁つて居るやうな文学者気質（かたぎ）といふものから、私達は斯ういふ著述を判断してはならない。寧ろ私達は斯ういふ著述によつてその文学者気質を洗はねばならない。田中君の作風は極めて地味ではあるが『悩める人々』から出発しようとするこの作家の前途には私は心ひそかに多くの望みをかけて居る。

（『藤村全集』　第九巻　昭42・7　筑摩書房による）

この時藤村は四十九歳、宇一郎は三十一歳であった。文中に「年若な友」とあるが、この前年、藤村を中心に白石実三、原田謙次、木村恒に宇一郎ら五・六名が毎月一回、麻布六本木の鰻屋大和田に会合した折、藤村は自分にはどうも弟子が持てないといい、彼等を「若き友」と呼んでいた。なお昭和十七年七月、鶴書房から出した童話集『幸福をくばる人』や、十九年六月に弘学社から出版した遺跡探訪『梅の丸窓』は、二科会の会員だった二男島崎鶏二が装幀し挿絵を画いている。

昭和四年三月、日頃病身だった宇一郎の妻が大病に罹り、床についたまま動けなくなり、宇一郎まで病臥して生活不如意に陥った折、藤村から突然書留小包で赤、青、黄の地に雲柄、金粉をまき散らしたような大判の美しい色紙が届いた。見れば藤村が好み、よく揮毫にも用いる芭蕉の言葉が見事な筆づかいで書かれていた。そして二三日後届いた島崎蔵と縁に刷った自家用原稿紙には次のように記されていた。

さて／＼君も骨の折れる日を送つてゐられることゝ思ひあたります
今日は序がありましたからお見まひのしるしばかりに屏風一双分色紙八葉に芭蕉の言葉をかきつけました　別封小包にて御送りしますから
これを誰かに買つてもらつて下さい　もしお心当たりがありませんでしたら○○社の○○○○○氏にでも御話し下さらばと思ひまして○○氏宛の書面を同封します　取りあへず御見まひのしるしまで
三月二十五日　藤

田中卯一郎様

何卒此際は勇気を振ひ起しその艱難に屈せざるやうくれ〴〵も祈上ます

（『回想の島崎藤村』より引用）

宇一郎は藤村の深い情に感激すると共に、愛蔵したい切なる思いを絶ち切ってこの紹介された人を訪ね、即座に引き取って貰い、お蔭で苦境を切り抜けた。などは、自らも不如意を体験した藤村の弟子を思う心情をよくあらわしており、その人柄が偲ばれる。

宇一郎が藤村のために最も力を尽くしたのは、最大かつ最後の長篇『夜明け前』の執筆の準備とその校正である。この作品は昭和四年四月から「中央公論」に発表、以後年四回の割で連載し、七年一月第一部、十年十月第二部が完結した。それを機に「定本藤村文庫」の出版に着手、『夜明け前』はその第一編、第二編として十一月、新潮社から出版された。『回想の島崎藤村』では、『夜明け前』について「準備の頃」「起稿」「生命を賭けて」「完成」「上演」の五章をこれに充てている。

準備については、島崎家は藤村の祖父から父の時代、木曽路の本陣であったので、先ず和宮御降嫁の際の木曽路の道中模様からはじまって、明治維新前後、五年頃、十年頃の東京の町の有様、徳川時代から明治初年へかけての本陣、庄屋の仕事（特に街道筋）中仙道殊に木曽街道に関する記事、徳川末期の農民百姓の生活等について調査を依頼されたという。そして古書肆をたずねて文政、天保時代の江戸大絵図や風俗史、世相史を購入することも頼まれた。この頃宇一郎が図書館で読んだ本は、維新当時の風潮に関するもの二十余冊、交通機関について二十余冊、改進、自由両党に関するもの三十冊、農民探求について二十余冊、古銭に関して十冊。その他種々の項目について繙読した書物も随分多かったと述懐している。

また、藤村の父正樹は平田派の国学の素養が深く、篤胤の後継鉄胤（かねたね）に会っているので宇一郎にも訪ねるよう依頼された。(注)7

藤村自身も実地調査のため御嶽に登ったり、郷里に長い間丹念につけた日記が残っている家があったので、幕末当時の木曽路の宿駅の参考になると借りて来て書き抜いたり、木曽の山寺に住む桃林和尚の日記を読んで、維新前後の緊張した地方の空気の理解に努めたりした。それらを筆写して綴じ込んで本の形にしたものを見せて、「これまでは歴史家の仕事で、創作家は、まだこれから先きへ進まねばならぬ。創作は骨が折れるわけですね。」と、洩らしたという。こうして準備に二年の歳月を費して、昭和四年から執筆に着手した。

校正は「中央公論」の切抜に藤村が夥しい書き入れをし、初校と共に宇一郎のもとに送り、それを宇一郎が校正して、新潮社の支配人中根駒十郎に送るという手順で行われた。宇一郎が藤村から受け取ったのは切抜と初校紙で、切抜にも既に夥しい書き入れがあり、いかにも丹念な藤村らしく、「書き入れの紙片を一々、その場その場に貼り付けてあった。」そして初校にも赤や黒のインキや赤鉛筆で校正した箇所があり、さらに処々に加筆がみられ、「最後まで磨きに磨きをかけようとする、その熱意には驚嘆せざるを得なかった。」という。宇一郎は時々藤村を訪ね、また打ち合わせのため藤村の著書に関する交渉に当たっている中根を訪ねた。そして自分の原稿その他の仕事を持ちながら、予定期日に間に合わせるよう夜半過ぎまでかかって校正した事も稀ではなかったらしい。宇一郎が所有する昭和六年十月二十四日付の藤村の葉書に、

只今別封速達便に托し第二回目に新潮社より届いた校正お送りします、これには大分誤字もありますがこのままお送りしますからよく眼を通してくださるやうお願ひします、小生もまた例の続稿の執筆で眼を廻してゐるところです

（『回想の島崎藤村』より引用）

とあり、この頃藤村が続稿すなわち『夜明け前』の第二部を「必死に書き続けて」いたことがうかがわれる。

しかし昭和九年十一月、「夜明け前」の第一部が久保栄の演出で新協劇団によって、次いで第二部が十一年三月、同じ劇団によって築地小劇場で上演された折、宇一郎は、「原作が親しみ深いだけに亢奮するほど」興味を覚えたらしいが、藤村は「初めから読む小説として書いたのだから芝居にするのは無理」と思っていたようである。

これより先、昭和二年七月二十四日、信州小諸城跡の懐古園に建立された「小諸なる古城のほとり」[注8]をしるした詩碑、昭和九年多摩川河畔溝ノ口の料亭亀屋の前庭に建てられた「国木田独歩にささぐ／昭和九年の夏　島崎藤村しるす／歴遊の地を記念して」の記念碑にも触れ、後者の除幕式に出席しなかったので、土地の有志に招かれて藤村夫妻と四女柳子、それに宇一郎や中村星湖ら数名が加わって、屋形船で鵜縄という珍しい漁をたのしんだ様子も詩情豊かに描かれている。

昭和十一年七月、藤村は第十四回国際ペンクラブ大会の日本代表に推され、静子夫人[注9]を同伴、有島生馬と共にアルゼンチンに赴き、帰路米国、フランスに赴き、翌年一月帰国した。出発時には和服だった夫人は、帰国時は洋服だったとも書かれている。

次いで『夜明け前』完成の後朝日賞を受賞した折の様子、昭和十七年の夏、日本文学報国会の発会式の際、演壇上の座席で一人藤村のみが白扇であおぎ続け、東条首相の祝辞の後、軍報道部の首脳者の話半ばで立ち去ったので心配したこと、同年秋藤村を訪ねた折、彫刻家で画家石井鶴三が作った和服姿の坐像「藤村先生像」[注10]の原型を見せられた。この他の藤村の肖像として、有島生馬が関東大震災による灰燼の廃墟を背景に描いた、表象的創造画[注11]の中の幾人かの人物の一人が藤村をモデルにしていること、次男鶏二の作品で、白地の一重物に愛用の裙[注12]を穿いているらしい姿で、簡素な白木机の傍らで、くつろいだ容子で膝に乗せた本を披見している肖像[注13]をあげている。

昭和十六年、藤村は時局切迫のため大磯の町家園の一軒を借りた。この別邸の佇まいについては、十九年九月九日に写生したという宇一郎のスケッチを添えて「竹芝の垣」の項に、また急逝を知って大磯に駆けつけてから戒名、墓標の準備、葬儀の模様、そして柩が地福寺境内に埋葬されるまでは、「白梅老樹の蔭」の項に詳しく述べられている。麹町本邸に於ける遺墨を眺めながらの通夜、青山斎場で営まれた本葬儀、七七忌や一周忌の模様がこれに続く。特に筆者の心に残ったのは、絶筆となった「東方の門」が、やはり「中央公論」に藤村と同時に掲載され始めた谷崎潤一郎の「細雪」も、中止せざるを得なくなった戦時下に、七十一歳の藤村が脳溢血で倒れるまで書き続けていたこと。「涼しい風だね」という臨終の言葉を遺してこの世を去った藤村は、生前静子夫人に、墓地の意匠について、トルストイの墓の写真を見て、それが大変気に入ったらしく、「立派な石碑など立てなくも、何か少しばかり樹木を植えて、何の誰それが此処に眠るとでも書いたものを立てた極く簡素なものでいい」などと話していたことである。

以上『回想の島崎藤村』を紹介しながら、著者の心の中に生き続けた藤村を偲び、改めて二人の深交を思った。「はしがき」にいうように藤村の「十三回忌を間近にひかへて漸く完成した」というこの追憶記は、長期に亘って「親近し、導かれ、励まされながら」しばしばその仕事を手伝い、とりわけ畢生の大作『夜明け前』の執筆の準備や校正に全力を尽くして協力した宇一郎ならではの回想録である。宇一郎は数々の手紙や遺墨についての感想と、藤村をめぐる人々とを織り交ぜて、余すところなく書き記している。「藤村研究の人たち」や「藤村に心惹かれる一般世人」、そして恐らくは後の世の人々にも伝えたい願いをもって書き残されたものであろう。

なお宇一郎は藤村の生前、秋田雨雀が編纂した『島崎藤村研究』(昭9・11楽浪書院)に二十五ページの「藤村先生の横顔」を掲載している。その中に、藤村は筆をとり始めたら食事の最中でも、浮かんだ妙想を忘れない中にと食卓を去って机に向かい、夜中でも寝床から起き出て書きとめるなどと記している。そういえば筆者も人見東明から、「藤村は電車の中でも、女子学生が話していると、若い女性の言葉づかいを手帳に書き留めたそうだよ」と聞いた記憶がある。

(五) 東明・宇一郎の書簡と『夜明け前』の校正刷

本学の図書館には東明から宇一郎に宛てた封書、葉書が十一通、宇一郎が校正刷りに添えた東明宛のものが一通、日本近代文学館には東明から宇一郎に宛てたものが十一通ある。二人の交際がいつ頃始まったかは分からないが、一番早いものは昭和三十年七月十三日の消印があり、三月の校難(注14)や『近代文学研究叢書』の創刊予定が記されているから、少なくともこの頃には交際していたらしい。次にこれらの中から藤村に関するものを紹介する。

(一) 封書 (ペン書)(昭和女子大学図書館蔵)

消印 30・9・6

表 北区滝野川三ノ二
田中 宇一郎様

裏 人見圓吉(自筆)

昭和女子大学 (印刷)
東京都世田谷区三宿町
電話 世田谷(42) 二四四二番
六七八一番

振替 東京二二一四二番

昭和三十年九月六日

御高著「回想の島崎藤村」たゞ今拝受、まことにありがたく存じました。御高著の主人公及びその家々などもかつてはうかがつた事もあつたので当時の事など想ひ出して一入懐旧の情にくれております。いつ想ひ出しても藤村はおだやかで、さびしくつて、正しい人です。その藤村を各方面からかいていらつしやるので時のたつのも知らずに読み耽けりさうですから、中間でペンをとつてお礼をしたためています。私がはじめて藤村の話をきいたのは九段中坂下のユニバーサリスト教会でありました。その時以来親近感にゆるぎはありません。人格の力です。私共の学校の会合にも来てもらつた事があります。それにつけても貴著が一人でも多くの人に読まれて藤村の正しい理解者がふえるようにと念じております。御高著本当にありがたく存じました。

田中　宇一郎様

人見圓吉

（二）葉書　（ペン書）（昭和女子大学図書館蔵）

消印　32・10・31

宛名　北区滝野川三ノ二

田中卯一郎様

差出人　世田谷区三宿町十

人見圓吉

まことに良いお催し[注15]、都合がつけば是非共参会致したいと存じます。藤村先生にはいろ〳〵とお世話にもなつていますので一入の感激であります。

十月三十日

（三）葉書　（黒いボールペン書）（日本近代文学館蔵）

消印　41・1・3

宛名　北区滝野川三ノ二ノ四

田中　宇一郎様

謹んで新春を賀し　（印刷）

併せて貴家のご清祥を祈ります

昭和四十一年元旦

東京都世田谷区太子堂一ノ七（昨秋町名地番変更）

人見円吉（自筆）

私共の学校の寮が大磯に出来ました御縁に藤村未亡人に敬意を表したいと思いながら怠っています。すぐ近い所らしいのです

「夜明け前」の校正刷ありがたい事に存じます　もしいただければ「近代文庫」で大切に保管いたします

（四）封書　（青いボールペン書）（日本近代文学館蔵）

消印　41・3・20

宛名　北区滝野川三ノ二ノ四

田中宇一郎様

差出人　東京都世田谷区　（ゴム印）

太子堂一ノ七

人見圓吉

謹啓、藤村先生の名作「夜明け前」の終章の初校刷お送り下さいましてありがたく存じました。一字一句もいやしくもなさらなかつた先生の厳格が校正の上にも添削の上にもあらはれて故人がしのばれます。それにつけてもあの名作に貴下が協力なされたのは意義のふかい事であります。表装のときは解説も加えます。いつまでも由来の一端が明らかにされてよろこばしい事であります。厚く御礼申上げます。

いよ〳〵両三日中に欧州の文芸行脚にお出かけの由、うらやましい事であります。いろ〳〵な文学の遺蹟を巡礼なさいまして詩情と智見をゆたかにしてお帰りになられます折を楽しみにお待ち申しております。

人見円吉

田中宇一郎様

（五）葉書　（青いボールペン書）（日本近代文学館蔵）

消印　41・6・14

宛名　北区滝野川三ノ二ノ四

田中宇一郎様

差出人　東京都世田谷区　（ゴム印）

太子堂一ノ七

人見圓吉

「夜明け前」校正刷の製本も本日出来ました。改めてお礼申上げます。よい記念になります。旅のつかれもなくなられたと存じますが、御都合のよろしい夜にでも寮生にご感想をおもらしいただきたいと存じます。まげて御願申上げます

（六）葉書　（青いボールペン書）（昭和女子大学図書館蔵）

消印　42・8・4

宛名　北区滝野川三ノ二ノ四

田中宇一郎様

差出人　東京都世田谷区　（ゴム印）

太子堂一ノ七

人見圓吉

暑中お見舞申し上げます

先日大磯で藤村先生のお墓に詣でました

東明の宇一郎に宛てたこれらの書簡には、藤村への親愛・畏敬の念が、そしてはじめて話を聞いた時の回想などもしみじみと綴られている。また、宇一郎から『夜明け前』校正刷の寄贈をうける前後のことも書簡から確認できる。

青木正美著『知られざる晩年の島崎藤村』（平10・9　島崎藤村コレクション第二巻　株式会社国書刊行会）によると、宇一郎が所有していた『夜明け前』の校正刷は、本学の他に日本近代文学館、本庄高等学校同窓会、清泉女子大学、藤村記念館、明治学院大学、跡見女子大学、山形県立図書館、静岡市立図書館に寄贈されたらしい。これは青木氏が『夜明け前』の校正刷を入手した折に「ここに欠除している部分は、左記にそれぞれ田中宇一郎氏が寄贈」としてこれらの大学名や館名をあげたメモが挟み込まれていたという記載からも推量できる。

本学に寄贈された『夜明け前』校正刷は、第二部の「終の章一」の「取りあへず、笹屋庄助と小笹屋勝之助の二人は青山の本家まで半蔵を連れ戻った。」から「六」の「万事終った。（中略）半蔵が息を引き取る前、」の「息を」まで。緞子の折本仕立てで表装され、見開きに毛筆で認めた宇一郎からの「昭和女子大学にささぐ」と書かれた文章が、裏表紙の内側には、同氏が人見円吉に宛てたペン（或いは万年筆）で認めた手紙が貼付されている。前者では先ずこの校正刷が『夜明け前』第二部の初版上梓（昭10・11）の際、主として藤村と自分とが校正したもので、黒インキと赤鉛筆と青鉛筆の処が藤村の加筆であると説明。

次いで藤村は八年間、殆どこの作品一作のみに精魂を傾け、苦心努力の末にこの「完璧の名作」を書き上げた。自分も藤村に依頼され、「資料の探求、調査、選択、蒐集」を手伝ったが、自分の助力がこの名作の執筆に多少なりとも役立ったならひとかたならぬよろこびであるという。後者は東明からの便りを受け取ったが多用続きで心ならずも延引したといい、本

日校正刷を二綴送ったが、長期間所蔵した為紙も古くなった。校正刷に添えた「概略の解説」（「昭和女子大学にささぐ」）はもし表装でもされる折には適当なところに貼り付けて欲しい。この校正刷もはや三十年になると思うと感慨ひとしおである。といった内容。なお文末に、数日後約一ヵ月間の予定で欧州各国の文学美術行脚に出掛ける故暫くご無沙汰すると記している。日付は三月十九日、署名の右肩に「紫草舎」のゴム印が捺されている。

校正紙には宇一郎のいうように赤や黒のインキや赤鉛筆が用いられており、青鉛筆も混じっている。赤インキには赤と、赤黒いものの二種類が使われている。尚校正紙の第一ページには丸に三つ柏の形をした「宇一郎文庫印」が捺されている。

田中宇一郎から贈られた『夜明け前』の校正紙は、先にあげた東明の書簡と共に、本学図書館の特別書庫に収蔵されている。

注1　引用文中のイプセンは当時の表記のイブセンの儘にした。

2　「ユニヴァサリスト」九月三日号の「世光社々則」では、「文芸」の次に七月三日号にはなかった「社会」が入っている。

3　松本女子師範学校の講演では、「もしイブセンの傑作を挙げるとなると、私は『人形の家』よりも『幽霊』や『ロスメルの家』を取るものですが、それからずっと晩年の作品の中にもっと深味のあるものを見出しますが、今日の私のお話はこれで尽きました。」とある。

4　「白哲」は「白皙」の誤植。

5　「シンプクハイ」は「シンプリファイ」の誤植。

6　町家園は五軒をもって一区画とし、明治時代には有力な政治家の秘密の会合場所であったらしい。

7　伊予の人、篤胤の門人。選ばれてその養子となった。名前は数種類の人名事典を調べたが「鉄胤」と「銕胤」の二様があった。

8　藤村の第四詩集『落梅集』（明34・8）に収録された代表作。藤村の揮毫。高村光雲の三男豊周が銅板に刻み、石にはめ込んだもの。

9　藤村は昭和三年十一月、「処女地」の同人だった加藤静子と再婚した。

10　膝に両手を重ね、やや前かがみになって伏目がちの高さ一尺あまりの小品、その年の上野の美術院展覧会に出品された。

11・13　いずれも二科展に出品。

12　裙（くん）。宇一郎によれば、和服の裾が長く出るいわば袴の短いようなもので、腰板は無く、黒絽のような薄物で作られており、藤村は晩年時々穿いたという。

14　昭和三十年三月一日深夜、本学は原因不明の火災で校舎の三分の一を焼失した。

15　昭和三十二年十一月、馬籠の本陣跡に建てられた藤村記念館の設立十周年記念式が行われた。また同月、小諸市立藤村記念館が落成した。

＊本稿に登場する人名および引用文中の旧字体は適宜新字体に改めた。
また、島崎藤村の著作からの引用は、概ね筑摩書房版『藤村全集』（昭41・11～46・5）によった。

＊東明の書簡公開に関しては、日本近代文学館並びに本学理事長人見楷子氏のご許可を得ました。記して感謝申し上げます。

（ささき　みつこ　本学名誉教授）